

にないかといったら、それじゃ羽地にあるのを——名護の食糧営団の支所があったんですよ、こっちに——宮城善吉という支所長がおって、そこに指令を出したんです。帳簿上米が残っている、まだ何千袋って、これから五百袋は愛楽園にでなく儀部朝一に出せと、それですぐわたしはここに来ましてね、名護に那覇から帰って、那覇でできないのでその指令書を持ってきましてね、何か伝達もしているか、電報かなにかももらったんでしよう、名護へ来た米はないんだといってやらないんですよ。あんたどうしてやらないんか、こういう指令が出てくるのに。こういうのをやらんというの、米がなくてやらんというのならば、できないんだと一筆書いてもらいましょう、それでいいと、それじゃそれを持ってわたしは食糧営団の保管係の出入端に話をするから。ないというとはいえないんじゃないか、むこうでは倉庫にちゃんがあるから、それからいろいろ話を聞いて、必らず恩納村のものからとってくるというんですね。向うから、しかしどういふふうに通ぶかというんで、愛楽園からわたしがかっちの輸送隊の曉部隊に交渉すれば荷馬車を百台も徴用できるから、営団としてはできないんだが愛楽園の仕事としてできるから、向うへ連れて、そういつたむつかしいことはできないんだというふうな事になったんですね。

ちょっとその前にはですね、それは後の話で、那覇で輸送は舟がやれないと決つたものだから、これをどのようにするかと思つて、これを馬車でできないかと、わたし一応家に帰りましてね、馬車で試験してみたいですよ、自分で。愛楽園の馬車を二頭だして職員を三名連れてですね、屋我地から午前九時、馬車を船に積んで真喜屋すね。そこで荷馬車をですよ、夜だから馬は恐れて、それに空襲だから馬なんか使えないんですよ。園の職員をみな動員してですね、馬車をわたしらがひいてですね、海岸はたまで行って米を運んで、わたしも伝馬船こいで、飛行機がくれば海にもぐるといふような状態で、そういうふうにしてようやく運んだんです。

ま、そのうちには色々なことがあるんですよ、実際は。米を運ぶには、これだけの伝馬船で五百袋は大変なもんだから、それで園長に相談しましてね、この米の五百袋というのは、ほかの人ではできない仕事だ、わたしでなければ。四百袋配給あるべきものを五百袋にしているのはわたしが……。わたしに二十袋くれといったんです。米五百袋を運んだあとで、酒屋の人から酒を二斗ぐらいつくってもらつて、これを部隊の人に持つていつてあげたんです。酒にみんな飢えてるんだからね。

わたし園の人にもいふんですよ。今考えてもですね、この仕事だけはね、どんなに偉い人とか、どんなに腕がいいんだといつてもやれる仕事じゃない。わたしはこれを自分の生涯の誇りにしておるんだとね。それを聞いて、早田園長とか庶務課長の泉正重とかのわたしに対する絶対の信頼がふえたんです。それに若い人、まあ、そう口では言わないんだが。園長など仕事においてまぼくにさせるんですね、わたしはまた命賭けでなんでもやるんですね。

そのころの住いは、屋我地ですね。店をもつておつたんです。囃話で、家族も屋我地におつたんです。園の屋敷の今の官舎付近です。官舎はずつとあとの話で、わたしも家作つてあつたんです。

それで戦争中は早田園長というのは、頭もいいし元氣のものでね、

で組み立ててですね。そこから、わたしも一緒に歩いて歩いて、仲泊に泊つたんです。翌日また首里に泊つてその翌日は味噌をですね、一台に百二十斤のものを八丁荷台に積んで来たんです。あの当時は今ごろの道じゃなく、もう泥んこの道ですね、多幸山なんかもう泥んこで、めりこまして馬車をこいうふうにする、荷物をおろして担いでそこをこしてまた積んでしたりして、恩納へ来たらB29が飛行雲をしておるんですね。あのときはじめてB29を見たんですがね、これも大変だと、わたしら麦畑に逃げたんです、くぼみに。帰ってきたらもうどうにもならんですね、二日でもう。これで那覇から食糧、米を積むということ到底できないと、わたしはすぐ断念して。それで名護からとるようにして、今の話になるんですね。とうとう羽地から取らないと、向うは米がないといつて返事ができないもんだから、それじゃ行こうといつて、羽地は当時親川清仁という村長で、助役は上地清嗣といつて、今病院かどこの庶務課長かしている。あれが羽地の助役時代に、行つて彼に話して羽地村が預っている米は少くないんだと、しかし、今度愛楽園に米を五百袋渡して、あと食糧営団に全然これからとらないという。はじめは預らないんだと断つておるんだが、戦争間際のときは米は預つたのを出さないようにしてから出し惜しみをするんですね。今度この五百袋までとれば、それ以上は羽地からとらないという約束できるならば渡そうというふうなことで、それで契約を結んで調印してですね。五百袋もらうのに、丁度向うの各字にはみな区長代理で米を保管しているのがおるわけですね。区長から指令を出しておつて、それを運ぶのにまたどうするかといふと、いかにいんで

またあの人に対する風当たりも非常に多かった。同じように何でもピシャツと押さえてきせよつたですからね。愛楽園の壕、あれは早田園長の強行命令なんです。こいういつた堅いところにどうしてトンネルが掘れるかといつてですね、みんなが聞かないのを、おしきつてですね、毎日毎日それだけを仕事にして、それでみんなが助かつたわけですね。

敗戦の前に、米軍が上陸しておるときに早田園長が天長節をしたんですよ。壕の中でわたしら職員だけですね。ニミッツ布告で、日本の行事はしていかないと、天長節のときに皇太后の写真を遙拜して天長節したら、これ米軍にわかつてからに、みんなひっぱられたんですよ。戦争中はわたしらこわくなかつたんだが、戦争あとがこわかつた。戦争前から戦争中にやつたのがみなバレてしまつたんですね。だもんだから、みなあのとアメリカの刑務所にひっぱられてから、わたしは銃殺宣告もうけてね、家内なんかも。

今帰仁に白石部隊がおつて、竹下中尉という人がいた。わたしはものずきでいろいろなものを持つておつたのです、兵隊なんかとりたいために、いろいろなスパイ容疑をかけて、それで屋我地から出るときには必らず屋我地の駐在所の許可を得て出るようにしなさいと、白石部隊から駐在に連絡してから、駐在所からわたしに伝達があつたのです。わたしはどうしても合点がゆかないで、また駐在所の人、この人もとつても黙意しておるのですね、わたしは責任を持つてから自由にしなさいといふことで、なんともなかつたんです。そのころ米軍は上陸はおるんだが、白石部隊から竹下中尉つかつて、わたしを殺してきなさいといふことになつたのですよ。

その三日前に、今帰仁の宮里政安がおりまして、若いころ友だちだった、今帰仁あたりでは通訳とか校長とか警防団長の謝花喜睦さんなんか、みなやられたのですよ、三名か四名。それで政安さんが、園長と泉正重さん（庶務課長）とわたしと三名が白石部隊から呼ばれているから非常に用心しなさいと伝言がきたんです。もうわたしはシヤクにさわって、……わたしがそういう意味もないのにこういうことがあると。その後二、三日してから、今帰仁でも四、五名殺されておる。夜来なさいとひっぱられてすぐやられているという情報はいったのですが、用心しておりますがね。それで政安さんからきたものだから、いいだろうということで、それで竹下中尉（自分の人）がきてからに、屋我地に行くと。それで饒平名のほうに渡っておると、饒平名で仲宗根センキチ（もとカジャしていた）に会って、孫次郎さんと屋我地のセンキチなんか会って、何しに来た、隊長の命令をうけて、儀部、早田園長は危険人物だといって、……あれは絶対そういう人間ではない、非常に日本人に対して熱血をふるっている、非常に好意的である、宜撫にしても非常にやっておるのに、まずする前に会ってみなさい、会えばどれくらい協力される人間かわかるよといって帰して、それで人をつかって馬でわたしのところに来たのですよ。仲宗根センキチというのは、屋我地でいつもでも懇意にしている、薪もつきたり兄弟みたいにしておったのですよ。竹下中尉が会いたいというふうなことなんだがどうかといったら、わたしは早速行った。そしたらもういなかったんですよ。隊長の命令を受けてから、自分らでもって問題を解決することができないから、隊長に報告してからというので帰って。わたしは運天

らって自由でしたからね、いろんなものやったりしたら非常に感激して、これは大本営にも報告することにしておるんですね。わたしはそういったことはいいらない、わたしは国民としてその位あたりまでというこで。

あの当時アメリカの憲兵も一日ごしにです、四、五名来て非常になごやかに話してわたしの話しておる。ところが、一週間ぐらい来ないんですよ。次に来たときには手榴弾や拳銃で武装して来る、今日みなひっぱりにきておるからその心構えをしときなさいと。それで第一番目に呼ばれたのが泉正重庶務課長でひっぱられてどこかに連れていかれ、そして二番目にわたしが呼ばれてですね、今の園の教会より古宇利寄りのところの広場の真中へ出て、三名で弾丸こめて取り囲むんです。わからんですわたしは、何のことでそんなふうにするのかと思って、一人ひとりみな連れてきたら、馬車持ちなんか連れてくる、舟の船頭なんか連れてくる。はあ、あの米の輸送したのがバレたのかなあと非常に不安になって、あのとときは身動きもできなかった。口を動かそうとしたら、すぐ拳銃で頭をこいうふうにやろうとするから。そのときに、泉正重さんはどこかで話をつけて許されたのか、米の輸送パレしているから隠すなど、わたしのところに石に書いて投げたのが届いたのです。兵隊に見えないように、石に書いてのを読んだらこう書いてるんですね。あ、大変なつたなあと思ってね、あのとときに銃殺だなんて思って覚悟したんです。憲兵の隊長がきて、どうしてあなたはここにすわっているの、あなたは関係ないというような言い分です。帰らなさいと隊長が言って、うちに帰ったんです。

原の渡しの所まで行ったんです。いないんで、それで翌日は何月何日に会いたいから是非待ってくれというんで待ったんです。あのとときには家内にも園長にも話して、竹下中尉が来て面会し、いざこざのものは何も話さないですね。わたしは、それはあのとくにわかるんだと。会いたいというのでそれじゃいいだろうといって、家内に竹下中尉が来るから二、三名分のごちそうをつくりなさい、高膳にしているんなごちそうたくさんつくって待たして。夜の十時ごろ来たんですよ。戸をたたいて。わたしはだませんよ、こわくて。話し合いつてからでるなら別だが、戸を閉めて掃除して、そうするまでに人間考えるわけですからね。それから竹下さんはちょっと明るいうところに立って合図しよつたから、ああ大丈夫と思って、部屋に入って、それからいろいろ協力の話、それで食糧の話がはじまって食糧を補給してくれと。そのときはわたしは、くれる（あげる）と言わないんですよ。ただいいでしょうと。園長と庶務課長はくれなさいと、わたしはできないと断ったんですよ。これをすぐくれたということでも他にバレた場合には大変だからと、竹下さんをそばに呼んで、彼に、わたし責任をもってやるからといって。そこに四、五名他の人もおりましたからね。それは日本俵の二十五袋ですね。あの百斤、これを半分にな荷づくりして、馬車四台に夜つめて二、三日にわたって輸送して、アメリカの軍艦がおるんですがね、そのそばをボートでみな、アメリカなんとも言わんです。第一回目ときはこわかったんですよ。電気はコウコウと照っているし、そのものは運んで。そこでまた竹下さんも二、三回行って、わたしに涙流して話する位でした。……わたしはアメリカの憲兵本部から、車も

帰って食事もお辱もまだとってないもんだから。そして園長がこつちからぶらぶらして歩くんです。婦りに、きみはどうして帰ってきたのかと、園長がわたしに聞くので、わたしは、隊長が婦りなさい、と言って帰したといったんです。米の輸送はみなパレしておるからね。逃げまわって嘘でもついたら大変なことになるから、みなバラしなさいと、わたし、園長にいったがね、あの人も絶対にはバラさないですよ。わたしがうちへ行ったら、みな心配しておるんですよ。婦されてから、うちに行くと同時にです、クロンボと泉事務長が、わたしのうちわかるもんですから、わたしが食事をとろうとするときに、連れてきてですね、わたしはまた引っぱられていったんですよ。もうあれからすぐ、動かもしなかった。ちよっと身動きをすると、また拳銃を引こうとするわけだからね。あのとときはもうあきらめてですね、ま、銃殺だなあと思って。それで、裁判するようになった。ここで裁判して、米の輸送がわかった。今の名護高校にアメリカの本部があったんですが、泉さんはここに引っぱられて、園長は連れられないで。それで園長は、儀部がいなければ、この食糧担当しておるから大変だろう、とたのんでおるんです、憲兵隊長に。裁判したら、きみはこの米の何十袋で日本の兵隊がどのくらい活躍して、アメリカに及ぼす弊害というのはあるのかわかりますか、それでいいのかと言ってね。わたしはもう殺されるもんとか考えんからね。死ぬぐらいなら堂々として死んだほうがいい、そうすれば家族も困から考えてもらうことしか考えんですわね。国民としては悪いとは思われないんだというね、この裁判官が二世なんです。別にどういことなくて、きみは今日それでいい

から、また呼ぶかもしらんから、三日間はどこにも動かないでうち  
にいつも待機してなさいという命令でした。それで毎日待機して、  
自分のうちの屋我地にすね、三日目に泉さんが向こうから、濱井  
出の坂で手を振っているんですね。儀部さん、儀部先生、喜こび方  
がわかるでしょう、早く逃げなさいという意味でか、何かわからな  
い。しかしあの人の声であれはい情報じゃないかと思つて。裁  
判にまぬかれて、それから仕事をしようになった。

そういうようなことです。それがどうしてバレよつたかという  
ですね、竹下中尉が戦死したんですよ、呉我出で。その戦死した手  
帳には、わたしがやった行動もみな書いてある。それからわたし  
が呼ばれて、また引ばられてね、田井等に四日間ぐらい留置され  
ました。園長にわたし、泉正重の三名、留置されてね、みな部屋  
は別々。(三、四回ぐらいいましたかね。いろいろな問題があつ  
て、恩賜の軍刀を隠しておるといふのがあつたり)それでわたし夜  
中引ばられて。田井等に憲兵本部があつたんですよ。嘘ついでい  
る者は通らないですよ。実際についているというし、自分はつか  
んというし。

あと威嚇をパンとして四発ぐらい拳銃を撃つたもんだからね。わ  
たし、あんときに泊りにきてすね、見たら、こっち側歩いとつたこ  
ころの写真とっているから、わたしがそれに嘘ついているとわかる  
ので行かなかつた。向こう写真とっているんだが、正直にあとから  
話したら帰れといった。あれからすね、アメリカの兵隊、人殺さ  
んと思つた。あの程度のこと、日本人ならすぐ殺しますよ。

伊平屋もちやうど食糧のことで、あの島のことだから、食糧がき

ろにきよとしたり、また機械かける。五名でかけるんですがね、  
動きもしないです。それでようやく、朝出たら、普通なら三時間  
半ぐらいで行くはずだが、晩しか着いてない。暮れると、みな赤信  
号もつてからに、救助してくれと。それでわたしは、あのとにも  
し万一のことがあったらいかんからといって、帆柱のなを舟にく  
くつてすね、機械のボルトを下、みなネジをはずして、ひっくり  
かえつたら機械すぐ落とす態勢とつたんですよ。命賭けで行つて、そ  
れで着こうとしたら、むこうの運搬船が、風があるんだといつてイ  
カリを五つぐらいおろしてからに、風向きにエンジンかけているん  
ですよ。近づいてみたら知り合ひだつて、わたしが戦前にずつと  
前に専用しておつた船長なんですよ。ああ儀部さん、それで上陸し  
てからにねむこうでそうめんを、御飯をこんぐらいいれてもひもじ  
いんです。あの辺のお椀が、そうめんなんか。もう見てびっく  
りしてね、食べることもできない。それで村の有志を集めて、話を  
してもらうようにして、それですぐまた翌日は出なければいかんか  
らね。電気技師と船頭のほうは、あんと一緒に行かない、あんと  
と一緒に行つたら命をとるから。来たときは向い風だが、今度追い  
風だから今度の場合は危なければ伊景名につけてもあたらにまか  
すから、来たときにはわたしは指揮しとるから、絶対帰れない、行  
くところまで行きなさい、そういうふうにしたんですよ。一応成功し  
た。帰えりは朝早くから、機械はずして分解して、オーバーホール  
して、かかるようにしたんですよ。帰ろうとしたら、運搬船から、  
きみ、そんなにしたら大変だ、それできない。帰えりは追い風  
であるしね。何も危険ないから帰ろうと思う。海は、ぼくらは素人

れてすね、どこへ行つても、交渉したけれどラチあかないんで  
すよ。戦争後です。アメリカの補給がないんで海軍の補給倉庫へ行  
つたらないし。それで伊平屋の食糧会社の米が本部に、自動車  
運んで船に積んであるんですよ。だが伊平屋の村民の了解を得な  
ければこれを譲らん、それを相談しに行く」と。船がでてしまえ  
ばまたも逆になるからね。船が行かんうちにいかなければいかん  
ということ。運天港でしかわたしたし船をのつていなかったんで  
す。わたしのクリ舟すね、機械、モーターつけて行こうとした  
ら、低気圧なんですね。船頭もちよつと無理だといふんだが、ぜひ  
行かなければいかんから行つてくれといふふうにしたんですよ。五名  
です。わたしと船頭の二人がボートの係、ほかの三名は電気とか機  
械がうまいからね、連れてつたんですよ。海にも、漁船なんかで  
つている、またわたしの下の海軍あがりの玉城。それで五名で、古  
宇利のうしろに行つたら、もう舟、波荒くてすね、これももう大変  
だな、はじがぬれたら寒いもんだから大変だ。それどころの話じ  
やないんです。機械が故障したりして。波がかぶつてすね、これ  
はもうどうなるかなあと思つて。それでも引き返しはせん。引き返  
すと米がとれない。大変だから。行けるところまで行こうじやない  
かと言つて。古宇利のところと伊平屋の間ぐらいが一番荒いん  
ですよ。舟がもうわれるようにして。二時間ぐらいても舟は大丈  
夫で。また底までもぐるんですよ。やっぱり上にあがる。これは  
沈みはせんのだといふふうなことを一瞬思つて。それに機械の故障  
がある。なおしてはする。瀬巻くところがあるんですよ、むこう  
に。したらもうこれ大変だと思つて、ちやうどあの辺の危険なこ

で、あれらは経験者ですからね。知らない。いや、今度はどう  
あんならにまかして、危険だと思えば伊景名に着いてもかまわんか  
ら、わたしは口出ししない。今度のは追い風ですよ。サーライ。す  
ぐ本部に着いて。本部の船はまだ天候が悪いから出ないんですよ。  
伊平屋はわたしが行つてきたといつたら、あんならこちに来て相  
談しにすればいいのに。これができると思えばね、そんな危険はお  
かさなかつた。すぐ直行したほうがいいんだ。そして米を借り  
たんですよ。

その話を一遍聞ぐらひして比嘉善雄先生にしたわけです。あの  
人、牧師なんか、なにか官房長かしておりましたがね。この前も  
うひどい目にあつて命おとすかと思ひましたよといつたら、そんな  
こともあつたのか、それじゃわたしが話してその余裕の分はなんと  
かしてあげる方法を図つてみようと言つて。善雄先生に働いて、  
今度三か月の余裕を、妻とか何とかがもつてきてもらったんですよ。

しかし、園長も職員もみな苦勞しましたよ。一生懸命です。今  
頃あのようなことやろうと思つても絶対あつかえませぬよ。五、六  
名、いつもすね、朝、職員集めて作業の命令をするんですよ。輸  
送のほうはわたしのほうで、米輸送で政府へ行つたりするから、強  
いものをすぐ五名ぐらひとつてすね、そのあとで園の作業に使い  
よつたから。米輸送するとき、舟を動かしながらすね。飛行機  
の空襲がくるでしょう。わたし裸になつてからね、舟の底にもぐつ  
たり、蔭にいつたりすね、いったことを何回もやつたんですよ。ま  
だ上陸しない前に。

ちやうど村上護郷隊の隊長の、恩賜組すね、村上大尉―あれは

たいしたもんでしたがね、戦争前は―その人のいろいろな情報なんかをわたしがこういうふう聞いてきよったんですが、それをわたしがまた情報して―本当の情報がよく知らないんだが、ちょうど舟が屋我地の沖の軍艦のところにきてですね、敵機が来襲するんだと。その前は毎晩運天港から魚雷艇がでるんです、月の晩に、何十隻と。魚雷艇の音わかりますね。今日も何隻いくんだなあ、と、耳もとで数えるんですね。どのくらい避るんだかなと、いつもお祈りをしてですね―正式にはやれなかった―心の中でお祈りをして、元気で選んできて―と。そういうふうにするんだが、選んてくるのは遅く、もうイライラ。あ、何か月の間に、一、二隻おったですね。それが長く続いてだんだん敵艦は近くなってくるという情報を聞いてですね。今の愛楽園の水道の森があるんですよ、双眼鏡をもってですね、上にのぼったんです。見ようとしたらですね、向うに敵の戦艦が、大砲の穴ですよ、目の前にきておるんですよ。軍艦はみえないですよ。すぐでたところがすぐ大砲の砲身の穴ですよ。レンズのいっばいにかかっているのに、わたしびっくりして、肉眼でみたら軍艦で、こりや大砲だといって、敵艦もすぐとあるので、それで壕に待機したんですよ。大砲でしたよ軍艦は、もう隙はないですから。屋ですね。アメリカ人は相当やられてるですね。物資の流れてくるあれで、みな救っておりますよ。物資の輸送船、食糧、油、Kレーション…海にみな流れついている。みな海に近くいて、アダンの下に居て、これら来るのを待ってとりよった。

艦砲射撃始まって、艦砲射撃の話をきいたのは、五メートルぐらいの山も撃ちぬくくらいということを聞いたもんだから、大砲だと、引きだされて殺されるとしか考えていない。上陸した場合には大変だし、そこまでわたし責任もちえないんだよ。そのときには、きみのいいように処理してもいいというふうなことでしたよ。それならお預りしよう。

その前にです、壕の中に頼のはいくらいの溜みをつくって、白い布はつかかかかか、一日一回毎日本人のぞきよった。この辺の壕の人が遙拝しよったんですよ。写真があるといって、ほかの人がこわくてですね、これなんとかしてくれよ。何をあんたは言うのか、日本國民としてね、こういうことは不敬な話じゃないかと言って。それをお預りしておるのが、これもしとられたらわたし大変ですよ。これもう大事にして、よその壕三つぐらいつくってですね、毎日移動ですよ。一緒につくった人が、どこにあるとしても、もしわたし人に知られたら大変だ。自分で秘密の壕三か所つくって―。そして艦砲がきたもんだからね、もう上陸間違いないだと、済井出のところによつと川があるんだが、そこをもぐりながらですね、園長にいて相談して、上陸するのは近い、御真影お返ししましようといったらね、先の話のように、万一の場合、どんな処置でもいいから、責任はわたしがおうからやりなさいということ、してわたしは預って最後までもっていったんです。

園長は、今度の問題に対しては、一番きみがすべてのものを知っておるから、皇太后陛下に必ず宮中から呼ばれるから、洋服もどろいって洋服をつくっていくとか、またどういふふうな報告をしなればいかにということ、その段取りしておるわけだから、そしてわたしもそういうふうにするつもりで。わたしひとりでしたっ

思っ、わたしは園の壕で爆弾でやられて、はねとばされましたよ。壕公園に園の職員の間山あるんだが、山みなトンネルしてですね。トンネルの間に家族塚みな掘ったんです。わたしがですね、こつちに爆弾、目の前、壕の前に落ちたんです。爆風サアアといつからに、窓なんかも吹き飛ばされますね。それでわたしら吹き飛ばされて、ちょうど自分の壕のところに吹き飛ばされて。子どもはみな安全でした。反対側のほうはもう爆弾の爆煙がして、真暗でもの見えないんです。ふさがれてどうにもならない。それでわたし小さい子どもひとり脇に抱いてですね、逃げようというにどうするかと思っ、窓はしない。誰もこうやっていききれない。わたしツルハシもって、スコップもって、向こうに行つて、ちつとも見えない真暗な間に、手ざわりしてからに、自分で。そして向こうがこのぐらいいいたら、あかりが見えるんですよ。ああ、もうしめたと思っ、そこをみな職員があけて出たわけですね。

園長とわたしとが爆弾のぐらいい落ちたか、晩はこれを計算しないといけない。家族は知らん顔して、うちの壕にきたらみえないんですよ。愛楽園おつたら大変なことだ、みな部落の壕に。探しもとめて、ちょうど墓の中にみないってなんです。墓の骨をみな園の職員のとこに、墓にはいって―。それが一週間ぐらいい続いて、また別の壕に移つて、したんだが。

わたしは御真影預っておるんです。この壕に。あのときは、ここに活躍する人が元氣そうなのはなくて、おじけるものだから、園長がわたしを呼んで、これ大事にしてくれないかと。奉戴するの、わたしやります。しまいに上陸間際ですよ。あのとき上陸した

て、また周囲からみても行かないからということでしたが、園長に呼ばれましたね、皇太子様にお会いしているんだ。上原信雄さんも呼ばれました。上原さんなんか、あまり何もしていないんだね本當の語。わたしがやった功績を上原さんが。これはどつちでもいいがね。

皇太后陛下の歌碑ですね。あれ運天港のまん中に沈めましたよ。舟にのせて、患者がこいで。アメリカが来てから。古宇利との間にですよ。戦後処理のひとつですよ。

軍隊との関係は、園としては直接ないんですよ。軍隊の新田という中尉が、ライと作戦とはいも伴うものだから、作戦するに必ずライから片付けなければいかにというのが原則らしいですね。その前に医者軍医の連中がきてライ収容したんですよ。わたしのほう、だいぶあのととき夜まで歩きましたよ。車をもって。泊るところは、ほとんどわたしの家でした。園の交際場所ですね。物資はあるし、人はあまりいないし、料理つくったり、うちの中が勝手であったり―軍とのつながりはその程度のものでした。七百名ぐらいいおったのが、軍がきて三百名近くは収容したんじゃないかと思っ、千名近く。

屋我地村には米軍の兵隊五、六名、海軍がいました。運天港からつながりの内海があるもんだから、ウィリアムスという軍曹がおつたり、あんまり偉い人はいなかったです。こつちにずつと駐屯するのではなく、帰ったりしたんじゃないですかね。係として食糧の配分の担当なんかしておったんですよ。わたしの世話もしてくれましたよ。

ところで戦争中、わたしらのうちに(園四)日本兵が逃げて来て治療して、そこでやってですね。白衣を着ておるんだが、官舎なんかにみな分散しておるんですがね。アメリカ兵が来ると、わしらがこれおんぶして山に逃げよったこと、何回もあつたですよ。おりてくるとなつたら大変でしたよ。どこの部隊とわからない山に入り乱れた敗残兵ですよ。屋我地には食糧があるということしてくるんですよ。

わたしらも、舟を買ってから、櫂を作って漕ぎかた教えたりして、逃がしたのたくさんおりますよ。というのも相手はしろうとだし、こうこうするといえは逃がすよりないですよ。途中どこかで、生ききれないところかで死ぬんでしよう。まあそれで三十分ぐらいですね、櫂の使い方ですね、手をとって教えてやったり一箇単に馴れるものじゃないから基本だけでもですね。わたしはまた、屋我地に何十年もいて、舟は道具みたいなもんで。アメリカは毎日、誰となく来ますからね。村上さん(護郷隊長村上治夫大尉)なんかも、わたしのうちに子分を連れたりして三、四泊って、すぐまた護郷隊長村上を捜して米軍の憲兵がきたといつて、伝令がきますからね。そのときには、すぐ引き揚げさせて、それからすませて、また知らん顔してぶらぶらして、目キョロキョロして、あのときすぐ逃がして。

それは二十年のはじめのころですが、もう入り乱れて日本もアメリカもなかつたんです。終戦になつても日本兵隊を捜して米軍兵隊は歩きよつたです。

敗戦のラジオを聞いたのは、園長とわたしと二人でしたかね。ち

## サイパン

### 沖繩爆撃の強制労働

南洋興発会社現場主任(当時) 長堂松次郎(四十歳)

#### 勇躍ノサイパンへ

大正十一年、私が十八歳の時、南洋興発会社がサイパン島における従業員の募集を沖繩でやっておりましたので、両親の反対を押し切って応募しました。その頃家が貧乏で上級学校にも行かして貰えないので未開の地で一旗あげてしようという野望に満ちていました。

当時の南洋航路には「筑前丸」「筑後丸」「八幡丸」「山城丸」などが就航しておりました。私の乗った船は「筑後丸」でしたが、サイパン島まで一週間から十日位はかかりました。

上陸後、島民の風俗にはおどろきましたが、会社では一心不乱に働きました。仕事を終えてからも会社幹部の家で風呂炊きなどをして働いたので、月収五五〇六〇円にもなりました。着いたじきは郵便局がどこにあるかわからず、現金をフンドシにぬいつけて、水浴する場合も目を離さず、肌身離さず持ち歩きました。

二か月目に親元へ一〇〇〇円を電信為替で送金しました。沖繩を立つ時の支度金として七〇円借金してきたので、まずその返済をしなければならなかつたのです。その時、電報も打ちました。「借りた金を返せ、酒一升、重箱一杯のごちそうと元利を添えて返えせ」という内容でした。あの時、父は私の電報も持って返済しにいった

ようど屋我地を飛行場にするとかいうことであつたらしいですね。それで療養所を今の奥間ビーチに、向うに移すということをして、どういふふうに移すかという、わたしらより詳しく、軍でもちゃんと計画しておるんです。一応現場検証ですか、それしなさいと言つて、わたしと園長と二人、アメリカの車に乗っていったことがあります。その途中、羽地に行く途中でラジオで聞きましたね、行かずにとめたんです。八月十五日ですね。あと一週間ぐらいしたら、もう患者移動しておつたんです。それまではあまりわからないんだが、あとで急に知らせが。これはもう大変だというふうなことでしたがね。このこと(飛行場建設)がもれたのは、軍医の誰かが患者の誰かにもらしておるのですね。わたしらわからない。こつちはあとで聞くと、飛行場にするとか、そういうふうな話をあとで聞きました。

大東亜戦争の開戦のときは覚えてないですね。そんなにまで騒いではいないんですね。ラジオは、電氣はついておるしね。サイパンが落ちたときですね。あのときにはちようど議会しておるのですよ、日本の国会。あのときの総理大臣は小磯総理大臣。陸軍大臣の小磯が兼任しておるんです。議会の答弁ですね、ちようど夜ラジオ聞いたんですが、園長とわたしと泉さんと。サイパンがやられたと。それで本土上陸作戦とした場合に一議会で報告ですね一国民皆兵で水際で戦わなければいかんというふうな、総理大臣の小磯さんの答弁ですよ。わたしあのときに聞いてね、国民が出て水際で戦うというのはよほどのことではなければならんと、あのときわたしは敗けると思つたですね、サイパンがおちたときに。

そうですが、なお二〇〇円あつたようです。たつた二か月で一〇〇〇円もの大金を送金し、その後も毎月五〇円親元へ電信為替で送金するので、村中で大評判になつてしまつたそうです。こんな例はハワイや南米へ行つた人の間でさえないこととなつたので、サイパンはハワイよりも良いらしいということになり、その後続々と屋敷名からサイパンへ出てきました。

しかし、その当時沖繩に殖産会社が二つあつたがいずれも経営不振で大正三、四年頃南洋興発会社が買収して、沖繩の従業員をサイパンで働かせていたので、石川、屋敷名方面からも、かなりの人が私に来る以前からサイパンで働いていました。

私がサイパンへ行つた時、屋敷名からは一〇名位一緒でしたが、私の評判でその後、数百人次々やってきました。そして私が受入れ先になつてしまふ船が着くたびに、沢山のスイカやバナナを持って出迎えに行き、その人達に南洋興発の適当な職場を紹介して仕事につかせていきました。

サイパンは本場に楽園でした。魚類は素手でとれるほど無数にあり、スイカやバナナなどは食べきれないでくさらすほどありましたので、なんの仕事につかなくても飯の心配はない状態でした。

私は沖繩からきた連中の希望をきいて南洋興発の鉄道敷設工事、工場建設工事、農場などの現場に各々配置させました。

私は最初から鉄道機関区に勤めました。まず汽車の掃除夫から始まり、車掌、機関のかま炊き、運転士と年月を重ねながら勤めていきました。運転士を十年も勤めたら、運転士の試験官もやらされ、更に配車係などの事務職もやらされるようになりました。